

夏らしさが日増しに強く感じられるようになりました。

暑さに負けず、公園で元気よく遊んでいる子供たちを見ていると、見ているこちらまで楽しくなるような気持ちになります。中には、夢中になって遊んでいるうちに、勢い余って転んでしまう子もいます。転んだ子は、しばらく自分の身に何が起こったのかわからない様子ですが、親御さんおやごの顔を見ると、堰せきが切れたように泣き出します。泣くことが、直接痛いところを治すことにはならないでしょうが、ひとしきり泣くとさっきまで痛かったことをすっかり忘れてしまったように、また元気よく遊び始めます。

子供たちは、痛みを伝え受け止めてくれる人がいるからこそ、安心して思い切り泣くことができます。

一方、大人になっていくにしたがって、痛みを受け止めてくれるところがなくなっていきます。痛みを耐え、立ち向かっていくことも成長していくうえで必要であると学習をしていき、その一方で、耐えていかななくてはいけないと強く思うあまり、痛いということをはかの人に気付かれないようにそっと黙だまってこらえていくようになります。

もちろん、黙ってこらえていたとしても、痛みも感じるし、痛みがなくなることはありません。辛さや悲しみを一人でこらえていくほどに、私たちは、自分がたった一人で抱えている痛みが、ただ一人、自分だけが抱えている痛みであると、思い込むようになってしまいます。あたかも、この世界にたった一人残されて、文字通り一人で耐えて生きて行かなくてはならないかのような気持ちになってしまうこともあります。

しかしながら、落ち着いて周囲を見渡すと、実際には、いつもそうであるように、私たちは一人ではなく、家族や友人、周囲の人など、誰かに見つめられ、支えられているのです。

じひ
慈悲のこころは、いつく
あわ
慈しみ憐れむこころです。私たちは、そのつらさや悲しみを分かち合っていることによって支えられ、安心して生きていくことができます。

また、慈悲のこころとは、支えられるだけではなく、自分から、自分の周りに向かっていつく
あわ
慈しみ憐れむ心でもあるのです。互いに慈しみ憐れむこころを持ち、見つめ合い、子どもの頃のように支えられていると気が付き、そして、自分もだれかを支える存在であろうとする。その瞬間に、もはや私たちは、たとえ世界のどこにいたとしても、決して孤独ではなくなるのです。